

## 女性のキャリアはどう変わる

加藤 千恵

### 一、女性キャリア開発研究センターについて

「女性キャリア開発研究センター」のセンター長をしている加藤千恵です。

キャリア形成学科に所属している教員でもあります。今日は「女性のキャリアはどう変わる」というテーマでお話をさせていただきますので、よろしくお願い致します。

私は四月にこの大学に来ましたので、皆さんと同じ一年生です。四月の初めに行われたキャリアガイダンスで少しお話ししましたので、顔覚えてくれている方もいらっしゃると思います。その時にお話ししましたね、キャリアとは仕事上のキャリアだけではないんだと。皆さんがこれから歩いていくことで、皆さんの後ろにできる足跡すべてが皆さんのキャリアなのだ。

女性キャリア開発研究センターは今年の四月にスタートしました。昨年までは「キャリアアセンター」という名称で、就職を支援する部署と、キャリア教育を担当する部署がありました。就職を担当する部署は、いま「就職支援センター」という名称になりました。そして、キャリア教育を担当する部署が、この「女性キャリア開発研究センター」です。

名前が新しくなったことで何が変わったかという点、支援する対象が広がりました。これまでのキャリア教育の対象は、在学生つまり皆さんたち学生さんでしたが、女性キャリア開発研究センターの対象は、学生さんだけでなく、卒業生、先生、職員の方々も対象になります。

多くの大学では、特に共学の大学では、キャリア支援というと、就職支援や資格取得支援のことを指すことが多いのですが、キャリア支援というのは大学の四年間で終わるといふものではありません。卒業した後には、仕事をする、家庭生活を営む、趣味の世界を広げる、新しい分野を勉強する、いろいろな方法で私たちはキャリアを積み上げていきます。

特に、ずっと休みなく働いてお金を稼いで家族を養うことが期待されている男性に比べて、女性のキャリアは多様性に富んでいます。ずっと働き続ける人もいれば、子育てや介護で中断する人もいる、再就職する人もいれば、ずっと家庭にいる人もいます。

## 女性のキャリアはどう変わる

同じ働き続ける人の中にも、正社員として働く人もいれば、派遣やパートタイマーとして働く人もいます。同じ専業主婦でも、子育て・介護に専念している人もいれば、地域活動に一生懸命な人もいます。

大学を卒業したらほとんどの人が就職するということは、大学は社会に送り出した人が困ったり迷ったりしたら戻ってこられる場所である必要があります。特に多様なキャリアを歩む女性にとって、母校はとても大切です。だから、女性キャリア開発研究センターは、卒業生のキャリア支援の方法も研究していきます。そして、この学校で働く女性の先生たち、職員の方たちも大事です。皆さんたちの身近なロールモデルとなる人たちですから。

なぜこの大学に、女性キャリア開発研究センターという部署ができたのか、少しお分かりいただけたでしょうか。

### 二、私のキャリア

さて、今日のテーマは「女性のキャリアはどう変わる」というものです。実はこの講座

を引き受けてほしいと小澤先生に言われたとき、「宗教講座」というタイトルがついていたので、私は、宗教の講座に相応しいお話はできないので別の方がいいのでは？とお返事したのですが、いいの、いいの、いろんな人に話してほしいから、お願い、と言われ、最後はあの小澤先生の笑顔と目ヂカラに負けてしまいました。

それでテーマは「女性のキャリアはどう変わる」としたのですが、お話しする内容を考えながら自分のキャリアを振り返ってみると、案外宗教の影響であるかもしれない気が付きました。それで私の自己紹介を交えながら、女性の問題を研究テーマにするようになったいきさつについてお話ししたいと思います。

## (一) 宗教と「サンタクロースの部屋」

私は小学校、中学校とキリスト教の女子校に通いました。キリスト教の学校にもいろいろあります。ここ京都では、同志社大学やノートルダム女子大学があります。厳密にいえば、カトリック系とかプロテスタント系とか違いがあるのですが、小さかった私にはそういうことはわかりませんでした。思い出すのは、教会のステンドグラスは綺麗だなとか、賛美歌やお祈りのことばを一生懸命覚えたとか、お祈りのときに使うロザリオが素敵だな

女性のキャリアはどう変わる

とか。

それから、信者の子、つまり洗礼を受けている子はクラスに一人二人いたのですが、ミサのときにその子たちが白くて丸くて薄いパンのようなもの、それはイエス・キリストの聖なる体、ご聖体というのですが、それを神父様からいただけるのが羨ましかつたりとか、そういうことを思い出します。

それでお分かりのように、私の両親はクリスマスチャンではありません。先祖のお墓は新潟のお寺にあつて、お葬式や法事は仏式で、でも初詣やお宮参りは神社に行つて、家には仏壇と神棚の両方があつて、クリスマスにはケーキを買つてきて、という、日本ではごく一般的な宗教感覚の家でした。

学長の一郷先生もよくお話ししてくださいますが、仏教はとてもおらかな宗教です。一宗教、つまり神と呼べるのはこの人だけ、という宗教を信じる人たちから見ると、日本人の宗教観は理解しがたいものだと思いますが、多くの日本人の意識の根底にある仏教が包容力のあるものであり、さらに自然界のいろいろなものに神様が宿っていると考えて、粗末に扱ふとバチがあたるとか、たたりを恐れるとか、そういう宗教感覚をもつ日本人には違和感なく受け入れられるでしょう。

なぜ私の親、とくに母が、私をキリスト教の女子校に入学させたかという、近所の男の子と遊びまわっていた私が、もう少し女の子らしくなれるようにと考えたからだそうです。でも女子校の女の子が「女性らしく育つ」かといえば、そんなことはない、というのは今や常識ですよ。母からは、せっかく女子校に入れたのに効果がなかった、と言われます。

仏教であれキリスト教であれ、どの宗教に接しながら成長するにしても、共通するものがあると気づいたのは、松岡享子さんという方の『サンタクロースの部屋』という本を読んだ時です。昭和五三年、一九七八年に出版され、今でも人気がある本です。私は子育て中の三〇歳くらいの時に読みました。

皆さんは小さい頃、クリスマスにはサンタクロースがやってきて、良い子にプレゼントをくれるという話を信じていましたか。松岡さんの本にはこういうことが書いてあります。少し長いですがご紹介します。

子どもは遅かれ早かれサンタクロースが誰かを知る。でも幼い日に心からサンタクロースの存在を信じることは、その人の中に「信じる」という能力を養う。心の中にひとたび

女性のキャリアはどう変わる

サンタクロースを住ませた子は、心の中にサンタクロースを入れる空間を作り上げていく。いつかサンタクロースはその子の心の外へ出て行ってしまっただろうが、サンタクロースが占めていた空間はその子の心に残る。この空間がある限り、人は成長するにすぎたが、サンタクロースに代わる新しい住人を迎え入れることができる。

この空間、つまり目に見えないものを信じるといふ心の動きが、人間の精神生活のあらゆる面で重要なことは言うまでもない。のちに、崇高なものを宿すかもしれない心の場所が、実は幼い日にサンタクロースを住ませることによって作られるのだ。

別にサンタクロースでなくてもいい。魔法使いでも妖精でも鬼でも仙人でも、物言う動物でも、空飛ぶ靴でも、打ち出の小槌でも、岩戸を開けるおまじないでもよい。幼い心に、これら不思議なものが住める空間をたっぷりとしてあげたい。

私は小さい頃、サンタクロースがプレゼントを持ってくると信じていたと思います。それが事実でないと気づいてからは、私の心の部屋からサンタクロースは出ていって、そのあとに入ってきたのは、小学校でシスターから教わった神様ではないかと思えます。

シスターたちから言われた言葉は、今でも記憶に残っています。「神様が見ていますよ。」

良いことをした時も、悪いことをした時も、いつでも神様はあなたを見守っていますよ」それは、仏さまが見守ってくれているとか、亡くなったご先祖様が見守ってくれている、というのと似ていると思います。

目に見えないけれど大切なものはたくさんあります。愛情、信頼、友情、正義、・・・皆さんの心にはいま何が入っているでしょうか。

## (二) 女性学との出会い

その後、私は、二〇歳代になって、女性学に出会います。

女性学は、あらゆる分野や領域で、女性がどのように位置づけられているかを研究する学問です。結論からいえば、一切の偏見なく、女性が一人の人間として尊重されている分野は、残念ながら存在していないといえるでしょう。それは、あらゆる分野や領域が、男性を中心に作られ動かされているためです。それは宗教も同じだということは、大人になってわかりました。関心のある方は、宗教とジェンダーに関する分野の本を読まれるのが良いと思います。

キリスト教にも仏教にもイスラム教にも、残念ながら性差別、つまり女性に対する差別

## 女性のキャリアはどう変わる

が存在しています。ただ、親鸞聖人の教えを説いた浄土真宗は少し進んでいるようです。初めて女性の僧侶が誕生したのは、西本願寺教団で、一九三一年、昭和六年のことです。今から八五年前のことですね。

そして、初めて女性の住職が誕生したのは、東本願寺、つまり真宗大谷派で、一九九一年、平成三年のことです。二五年前ですから、皆さんが生まれる少し前のことです。宗教の長い歴史からみると、つい最近のことです。

私は大学院時代に女性学に出会い、その後、性差別に関する本や資料に触れる機会が増えました。そんな時、真宗大谷派で初めて女性の住職が誕生した、ということを目にしました。とても嬉しくて、その時に「真宗大谷派」という宗派の名前が私の頭にインプットされました。もちろんその二〇年後に、その学校の教員になるとは思いもしませんでした。が。

今度は、女性学との出会いについてお話しましょう。

### 三、女性学とは

私は大学で社会学を専攻していました。その後大学院に進み、ある女性の先生から、「女性学っていうのを始めようと思うんだけど、一緒にやらない？」と声をかけられました。正直、学問に男も女もないんじゃないの？女性の学問って何？という、やや懐疑的な気持ちで先に立ちました。

でも、もともと好奇心が旺盛なので、行ってみるかと軽い気持ちで参加しました。何回か参加するうちに、私がそれまで疑問に思っていたことが、学問として研究されているんだ、ということに驚き、どんどん興味が湧いてきました。

どうしてそんなに面白いと思ったのか、二つの例をあげて説明しましょう。

#### (一) 大学時代の疑問

先ほどお話ししたように、私は小学校、中学校と女子校に通いました。高校は別の女子校に進学して、大学受験を経験せずにそのまま、その大学に進学しました。大学は共学

## 女性のキャリアはどう変わる

でした。小中高の一二年間を女子だけで過ごしたわけですから、共学は、幼稚園以来、二年ぶりということになります。

大学ではテニスのサークルに入りました。男女が同数所属するサークルで、とても楽しかったのですが、どうにも気になることがありました。

それは、サークルの代表や役員を男子たちが決めてしまうことです。今度どこのチームと試合をするかとか、試合のメンバーや練習のスケジュールも男子たちが決めてしまう。合宿に行くと、男子部屋が作戦会議の場になっていて、女子は入れない。女子は何をしているかというところ、食事の配膳をしたり、空いた時間はおしゃべりしたりお菓子を食べてり。

それまで女子校で、クラブ活動や生徒会、文化祭、先生たちとのやり取りも自分たちが中心になってやってきた私にとって、何となく違和感のある空間でしたが、どうして違和感を覚えるのか、自分でもうまく表現できませんでした。他の女子に、「何でも男子が決めちゃうね」と投げかけたこともありましたが、たいていの女子は、「え？いいじゃない。男子がやりたがってるんだからやらせておけば。それよりケーキ食べに行かない？」という感じで、何となくかみ合わないことがありました。

テニスサークルの男の子たちは、それまでの先輩たちがやってきたように、特に疑問なく自分たちで物事を決めていたのかもしれない。女子も入れてほしいと言えば、入れてくれたかもしれません。でも、男子が物事を決めるという文化をもつ集団の中で、女の私も入れてほしいと言うのはなかなか勇気がいることです。

でも、女性学の勉強会に行ったら、そういう文化をおかしいと思っている女性や男性が大勢いましたし、どうして女性が排除されてしまうのかを研究する人たちもいました。

## (二) 結婚改姓問題

もう一つの例は、結婚改姓問題、つまり、結婚で名字を変えることについての問題です。好きな人の名字になりたいと思っている人には、どうしてそれが問題なのかわからないかもしれませんが、昨年、最高裁判所が、夫婦が同じ名字を名乗ることを規定した現在の法律が、男女平等をうたった憲法に違反するのかもしれないかをどう判断するかで、だいぶ話題になりました。人によっては、その人の人生、生き方に関わる問題で、まさに人権の問題です。

今の日本は、婚姻届を出そうと思うと、どちらかの名字に統一しなければなりません。

## 女性のキャリアはどう変わる

婚姻届を出すカップルの96%が、女性側が名字を変えています。できれば変えたくないという女性も少なくありません。

私が結婚した頃は、今のようには、選択的夫婦別姓の議論は起こっていませんでした。

「選択的夫婦別姓」というのは、別姓にしたいカップルは別姓で、同じ名字にしたい人は同姓で婚姻届を出す、というように、好きな方を選べるようにするという制度で、若い世代には制度の成立を期待する声が大きいのですが、年齢の高い世代には反対の意見も根強くあります。

私は、「加藤千恵」という名前で生まれて、死ぬまでずっと加藤千恵という名前で、結婚して名字が変わることがあっても、それは「仮りの名前」で、本当の名前は「加藤千恵」なんだと子どもの頃から何となくそう思ってきました。だから、結婚して戸籍の名前は変わりましたが、加藤千恵の名前で仕事をしていました。勤務先も、加藤千恵の名前で給料を払ってくれましたし、保険証の名前も加藤千恵のままでした。

ところが、妊娠して役所で母子手帳をもらったら、表紙に戸籍上の名前が書いてあったのです。でもあまり気にせず病院に行きましたら、保険証と母子手帳の名前が違うので、看護師さんに怒られました。なんで名前が二つあるの？どっちが本当の名前なの？

当時は今のようには夫婦別姓が話題になっていませんでしたから、看護師さんの怒りはもつともだったかもしれませんが。どうして加藤千恵のままでいられないだろう……そう思っていたら、これまた女性学の分野で夫婦別姓について研究している人たちがいることがわかりました。

そんなこんなで、女性学に出会ったことで、社会の仕組みに対する私の疑問はどんどんほめていき、気が付いたら、どっぷりはまっていたというわけです。話を元に戻しましょう。

大学、大学院時代の私の指導教授は男性で、女性の社会進出に前向きな方でしたが、でも話をよく聞いてみると、能力と意欲のある女性は社会で活躍した方がいい、逆に言えば能力・意欲のない女性は家庭にいなさい、ということなんです。それは他の男性の教授も似たり寄ったりで、面と向かって私に、「女性の先生の子どもは母親がそばにいないから可哀想だ」とおっしゃる方もいました。

当時の私には「性役割」とか「ジェンダー」の知識はありませんから、私たち女性も男性と同じようにやりたいことがあるのに、女に生まれたらできないわけ？女性の人生って何だろう……と疑問が膨らんでいました。

## 女性のキャリアはどう変わる

そういう時に私は女性学に出会ったわけです。誘ってくれたのは、岩男寿美子先生という社会・心理学の教授で、まさに「母親が働いていると子どもが可哀想だ」という男性教授たちの声に悩まされながら、それを振り払いながらキャリアを積んできた方でした。

当時、日本にも「女性学」という学問分野を確立しようという動きが各地で始まっていました。一九七〇年代後半のことです。四〇年近く前になりますね。

女性学、英語では *Women's studies* ですが、一九六〇年代にアメリカで広がり始め、大学で授業が開講されるようになっていきました。日本でも女子大学、女子短期大学を中心に授業が置かれるようになり、今では「女性学」というタイトルがついていなくても、女性学の視点、ジェンダーの視点を取り入れて授業を行っている先生は大勢いらっしゃる。

女性学が対象とする分野は無限にあります。それは、女性学が、男性たちが作り上げてきた学問や様々な仕組みを、女性たちの目で捉え直したらどうなるか、という問題意識で構築されているからです。だから、その対象はすべての学問、すべての領域に及びます。逆に言うと、女性学の対象にならない分野はない、ということなんです。具体例を挙げて説明しましょう。

#### 四、ジェンダーは人権の問題

「女性学」が学問として確立する前は、「男は強くたくましく、女は優しく可愛い」とか、「男は仕事、女は家事・育児」とか、「男は理系、女は文系」とか、「男は論理的で女は感情的」とか、男と女は生まれつき性格や能力や向き不向きが違う、だから役割が違うんだ、ということが当たり前だと思われていました。今でもそう思っている方がいらっしやるかもしれませんね。当たり前のことだと思っていると、そこに何か問題がある、ということになかなか気づきません。

「女性は生まれつき子育てに向いている」と思われている社会では、子育てがわからなかったり、子育てでストレスを感じている女性は、「自分は母親として失格なのではないか、女性らしさに欠けるのではないか」と悩んでしまいます。周りの人たちも、昔の女の人は五人も一〇人も育てていたのに辛いなんて言わなかった、とか、子育てがつらいなんていう母親はおかしい、となってしまうです。

でも、「女性は生まれつき子育てに向いているのではない、子育てに喜びを感じられる

## 女性のキャリアはどう変わる

ように社会が育てていくのだ」と考えれば、子育てがつらくなる、ストレスを感じる女性  
がいても不思議ではありません。

なぜ子育てがつらいのか、どのくらいの母親たちがそう感じているのか、どういう状況  
に置かれたらそう感じるのか、こういったことを丁寧に調べていくことによって、孤立し  
たお母さんたちの育児不安、育児ストレスが明らかになり、お母さんたちをサポートする  
仕組みが作られていきます。男性の研究者だけだったら、こうはいかないでしょう。

### (一) ジェンダーの思い込み

ちよつと想像してみてください。

皆さんの前に小さな男の子がやって来て、こう言いました。

「ボクね、大きくなったら飛行機に乗る仕事をするんだ」

さあ、どんな職業が浮かびますか？パイロットでしょうか。

今度は小さな女の子がやって来て、こう言いました。

「ワタシね、大きくなったら飛行機に乗る仕事をするんだ」

さあ、どんな職業が浮かびましたか。パイロットは浮かびましたか。恐らく多くの人

が、男の子に対してはパイロット、女の子に対してはC A、キャビンアテンダント、客室乗務員ですね。

でも、その子がパイロットに向いているのかC Aに向いているのか、小さいときにはわかりません。もしかしたらその男の子はC Aに、女の子はパイロットに向いているかもしれません。でも私たちは、これまでの思い込みから、良かれと思って、無自覚に、男の子はパイロット、女の子はC Aと誤ってしまい、もしかしたらその方向に誘導してしまうかもしれません。

女性学という学問は、世の中の人たちが、男は○○で女は○○だ、と言ったり、男と女は生まれつき性格や能力が違うと言っていることに対して、それ本当？と疑問を投げかけました。そして、仮に男女で性格や能力に違いがあったとしても、個人差の方がずっと大きいことや、男と女は生まれつき性格や能力が違うという考え方に基づいて社会のいろいろな仕組みが作られていることを明らかにしてきました。

平成十一年、一九九九年、一年生の皆さんが生まれた頃ですね、男女共同参画社会基本法という法律が施行されました。この法律には、「男女が互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合うこと、性別にかかわらずその個性と能力を十分に発揮することができる

## 女性のキャリアはどう変わる

社会を実現すること」がうたわれています。女性学やジェンダーが扱う分野は、人権の問題でもあるのです。

ジェンダーというのは、「社会的・文化的に形成された性別」のことです。つまり、先ほどお話した、男は何とか女は何とかとか、男と女は生まれつき性格や能力や向き不向きが違う、という考え方のことを言います。

この考え方にとってもフィットする人もいます。つまり男らしい自分にとっても満足している男性や、女性らしい自分にとっても満足している女性は、特に疑問を感じないかもしれません。が、フィットしない人、つまり、「男らしく強くたくましく」と思うけれどしんどいなど思っている男性、「女らしく優しく可愛く」と言われるけれど窮屈だなと感じている女性にとって、ジェンダーの問題は自分らしく生きられるかどうか、まさに人権の問題に関わってくるのです。

今日の講座のテーマは女性のキャリアです。女性は結婚して子どもを産んで育てて、それが一番幸せ、という、単一の価値の時代には女性のキャリアについてあれこれ考える必要はあまりありませんでした。

でも今日日本は、そして国際社会も、性別にとらわれることなく女性も男性もその個性と

能力を發揮することができるような社会を目指しています。そしてその社会の実現のためには、壁として立ちちはだかっているものがいろいろあります。

それらを明らかにしていくためには、男はこうあるべき、女はこうあるべきという固定的な見方をしていては見えるものが見えなくなってしまうということなのです。

## (二) ジェンダーによる水路づけ

ここでスライドをご覧いただきましょう(図1)。

私たちは、自分で自分の道を選んでいることが多いと思います。もちろんすべて思い通りの道を選べるわけではありませんが、皆さんのおばあさんの時代に比べれば、進学先、就職先、結婚相手、はるかに自由に選べるようになって

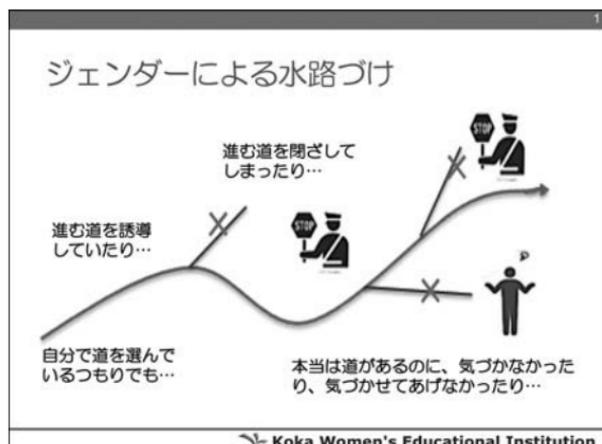


図1 ジェンダーによる水路づけ

女性のキャリアはどう変わる

いると思います。

でも、ジェンダーの思い込みによって、つまり、男はこうあるべき、女はこうあるべき、という思い込みによって、別の方向に道があるのに、目に入らない、見えていない、ということはないでしょうか。

医者にならなかったけれど医学部に入学できなかったとか、学費が用意できなくて諦めたとか、弁護士にならなかったけれど司法試験にパスしなかったとか、こういう経済的な理由や能力的な理由でその道に進めなかった、ということは男性でも女性でもあるでしょう。そうではなくて、もし男性に生まれていたら見えていたかもしれない、もし女性に生まれていたら見えていたかもしれない、そういう道がありませんか？というお話です。

また私の話で恐縮ですが、私は小さい頃、遊園地のゴーカートが大好きでした。一度乗っただけでは満足できなくて、何度も乗りたいわけです。アクセルを踏むとグリーンとスピードが上がっていく感じや、ハンドルを切ると右に行ったり左に行ったり、好きな方向に行かれるのがとても好きでした。

でも私の母は、女の子は女の子らしく、という人でしたから、私がゴーカートを乗り終えて、「また乗りたい」というと、「また？女の子なのに？」「今度は観覧車に乗ったら？」

と言うわけです。「観覧車？あんなにのろいのに乗って何が面白いんだろう」と私は思っていました。

子どもは敏感です。自分の行動を親が望んでいないことを察します。私もそうでした。ゴーカートに乗りたがる女の子は、女らしくない、ということに気づいたわけです。

一八歳になったら車の免許がとれます。早く運転をしたかった私は、一八歳になったら免許を取りたいと思っていましたが、母から、だめ、と言われました。理由は、危ない、でした。いくつになったらいいの？と聞いたなら、二十歳になったら、と言われたので、二十歳の誕生日に教習所に申し込みに行きました。

でも三歳下の弟は、一六歳でバイクの免許を取り、一八歳で車の免許をとり、不公平だと母に文句を言うと、返ってくる言葉は、「だってあなた女の子でしょ」。そう言われると否定できないのでいつも悔しい思いをしていました。

もし私が男に生まれていたら、「またゴーカートに乗りたいの？やっぱり男の子ね、車が好きなのね」と言って、もっと乗せてもらえたでしょう。この子は車が好きだということ、車のおもちゃや絵本、ラジコンやプラモデルも買ってもらえたかもしれない。さらに、車の運転や電車、飛行機の操縦を体験できる施設に連れて行ってもらえたかもしれ

女性のキャリアはどう変わる

ません。そして、そういう職業を将来の選択肢として考えたかもしれません。

でもあいにく、私の子ども時代は、タクシートの運転手さんもトラックのドライバーも男性ばかりで、そういう道がある、ということに気づきませんでした。つまり、私には道が見えなかったのです。

皆さんはどうですか。女性の方はもし男性に生まれていたら、男性の方はもし女性に生まれていたら、見えていたかもしれない道はありませんか。

こういう話をしたら、女に生まれていたら専業主婦になりたかった、でも男だからできないよね、と言った男性がいました。なぜできないと思ってしまったのでしょうか。男性たちも結構窮屈な道を選ばされているのかもしれませんが。男だったらこうしなければいけない、こうでなければならぬ、自分たちが付けているヨロイのようなものを、男性たちが研究する学問を「男性学」といいます。こういう分野ももっと発展して欲しいと思います。

(三) おもちゃとジェンダー

さて、今回はお手元のプリントについて少し説明しましょう。「たかがおもちゃ、され

どおもちゃ」という見出しがついています(青野篤子編著『アクティブラーニングで学ぶジェンダー』二九〜三三頁 ミネルヴァ書房 平成二八年)。ここには、ジェンダー、つまり、男はこうだ、女はこうだ、という固定的な思い込みをなくして、おもちゃを調べたら、こういうことが分かりました、ということが書いてあります。あとでゆっくりご覧ください。

皆さんはどんなおもちゃを買ってもらいましたか。デパートやスーパーのおもちゃ売り場に行くと、男の子用のおもちゃと、女の子用のおもちゃと、どちらでも遊べるおもちゃに分けられています。男の子が女の子のおもちゃを選んだり、女の子が男の子のおもちゃを選んだりするのは、ちよつと勇気がいります。

私には二人の子どもがいます。二人とも女の子です。もう大人になりましたが、小さい頃は女の子のおもちゃにとらわれないように買ってあげました。だから、子どもたちは、リカちゃんやバービーちゃん、おままごとセットも欲しがりましたが、五人戦隊ヒーローもののロボットや、電車のプラレールセット、刀やピストル、ラジコンも欲しがりました。子どもたちに言わせると、お人形はキラキラして可愛いから、ロボットや刀はカッコいいから、ということでした。

## 女性のキャリアはどう変わる

プリントの最後のページに、「ベビーXの実験」が載っています。生後数か月の赤ちゃんが、男の子だと聞かされた大人と、女の子だと聞かされた大人では、対応が違ってしまふ、という実験です。皆さんも心当たりはありませんか。

私たちは、赤ちゃんの性別がわからないとき、着ているもので判断します。ピンク系なら女の子、ブルー系なら男の子というふうには。そして、女の子なら、可愛い赤ちゃん、男の子なら、元気そうな赤ちゃん、というふうには、見方を変えませんか。

今日はおもちゃを例にお話ししましたが、性別による偏り、これを「ジェンダーバイアス」と言いますが、こういうことは至るところにありますから、ぜひ探してみてください。

### 五、女性のキャリアの変化

さて、もう一度スライドに戻しましょう。今度はいくつかグラフを使って、ここ三〇年、四〇年くらいの変化を見たいと思います。

## (二) 女性の労働力率

最初のグラフです(図2)。これは、どのくらいの女性が働いているのかを年齢別にみたものです。

一番下の赤い線は、昭和五〇年、一九七五年の線で、今から四〇年前のもです。二〇代後半と三〇代前半にかけて、へこんでいます。結婚、出産によって仕事を離れる人がいたためで、四割くらいに落ち込みます。この線をM字型といいます。四〇年前に三〇歳前後だったということは、現在七〇歳前後の女性たちです。皆さんのおばあさん世代ではないかと思えます。この時代、女性はクリスマスケーキと言わ

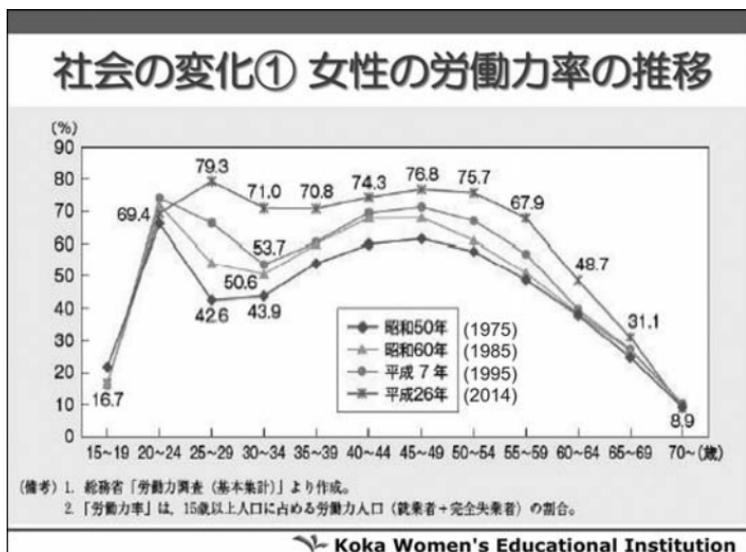


図2 女性の年齢階級別労働率の推移  
出典：内閣府「平成27年版男女共同参画白書」

女性のキャリアはどう変わる

れました。聞いたことありますか。

クリスマスケーキは二四、二五には売れますが、二六日には売れませんね。それを女性の年齢にたとえた言い方で、本当に失礼な言い方だと思いますが、女性たち自身も、できれば二四歳まで、何とか二五歳までには結婚したい、と思っていました。

その上の緑色の線は、昭和六〇年、一九八五年の線です。今から三〇年前の線です。M字型のへこんでいる底の部分をよく見てください。赤い線では、二〇代後半が一番へこんでいましたが、緑の線になると、三〇代前半が一番へこんでいます。出産年齢があがったことで少し形が変わってきましたね。三〇年前に三〇歳前後だった人たちですから、今六〇前後です。私はここに入ります。

次は青い線です。平成七年、一九九五年の線です。二〇代後半の線はだいぶ上に上がってきました。でも三〇代前半の子育て期はガクンと落ちていきますね。二〇年前に三〇歳前後だった人たちですから、現在五〇前後の人たちです。

そして一番上のピンクの線は、平成二六年、二〇一四年の線です。現在三〇前後の人たちです。二〇代後半は八割が働いています。三〇代前半でも七割が働いています。どうですか？思っていたよりたくさん女性の女性たちが働いていますね。

まだ日本は少しM字型が残っていますが、欧米先進国はもう台形になっています。おそらく日本も台形になっていくでしょうし、国の政策もその方向に動いています。

「でも女性が大勢働くようになると、少子化は大丈夫なのかな……」、そう思う人がいるかもしれません。実は、先進国における少子化の原因は、女性が働き続けるから子どもを産まなくなるのではなくて、働き続けることが難しいから産まなくなる、ということがわかっていきます。

四〇年前、五〇年前の女性たちは、子どもを産んで育てることが女性の役割だと教えられてきましたし、仕事と家庭を両立させることはとても難しかったし、一生懸命働いても補助的な労働力としてしか扱われませんから、家庭に入って子どもを産む人が多かったです。でも今は違います。少子化問題を解決するためには、出産しても働き続けられる社会を作る必要があるのです。

## (二) 共働き世帯数

次のグラフは、共働き世帯数の変化です(図3)。赤い線は、会社などに勤める男性と専業主婦の家庭で、緑の線は、夫婦とも会社などに勤めている家庭の数です。

女性のキャリアはどう変わる

一年生の皆さんが生まれたのは、平成一〇年、この辺りででしょうか。共働きの家庭と専業主婦の家庭が同じくらいです。小学生になった頃はこの辺り。共働き世帯の方が増えてきていますね。

でも私が子どもを産んだのはこの辺り。専業主婦世帯が圧倒的に多かった時代です。「保育園に子どもを預けて働くなんて子どもが可哀想」と言われた時代です。

今は、「保育園落ちた、どうするんだよ、私活躍できないじゃないか」という母親の怒りが、メディアで、国会で、取り上げられる時代です。ずいぶ

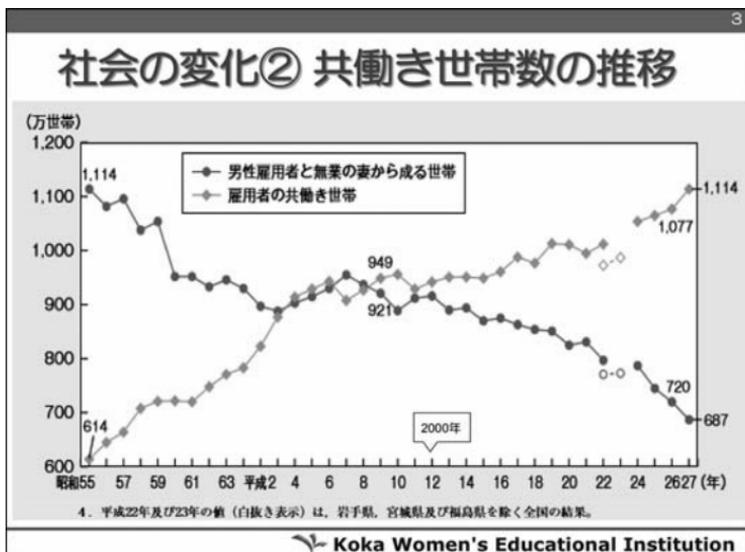


図3 共働き等世帯数の推移  
出典：内閣府「平成28年版男女共同参画白書」

ん変わりました。

さて、このあとはどうなるでしょう。お分かりのように、専業主婦世帯はどんどん減っていますから、もう後戻りすることはないでしょう。

ちよつと補足すると、平成二三年のところで線が切れていますね。なぜか分かりますか。そう東日本大震災です。正確な数字がとれなかったために線が切れています。表やグラフって数字ばかりで無味乾燥なものに見えますが、気を付けてみると、人々の人生や暮らしが透けてみえることがあるんです。

### (三) 女性の就業意識

三つ目のグラフは、就労、つまり働くことについての女性の意識の変化をみたものです(図4)。率が低い方からみていきましょう。

一番少ないのは、赤い線で、「女性は職業をもたない方がよい」という意見。わずか2%です。次に少ないのが、緑の線で、「結婚するまでは職業をもつ方がよい」、つまり、結婚したら仕事をやめて家庭に入る、という意見です。これも5%くらい。

次に少ないのが、青い線で、「子どもができるまでは職業をもつ方がよい」、つまり、子

女性のキャリアはどう変わる

どもができたなら仕事をやめて家庭に入る、という意見です。これも一割くらい。この3つを足しても、二割くらいにしかなりません。率が高い上の二つの意見（再就職型と就業継続型）にはまったく届きません。

上の二つの線は、平成一五年、今から一二、三年前に入れ替わりました。皆さんが小学校にあがるくらいの頃です。

それまでは、この茶色の線、「子どもができたなら職業をやめ、大きくなったら再び職業をもつ方がよい」、つまり再就職型ですね、それが一番多かったのですが、一二、三年前に、ピンク

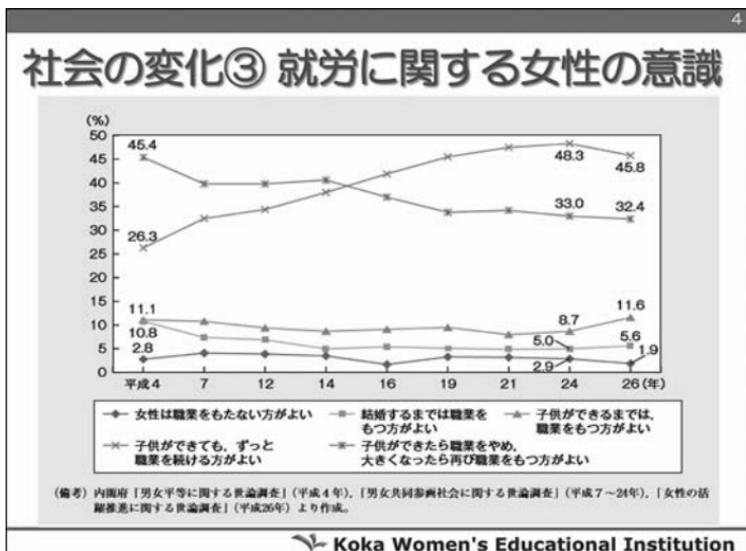


図4 女性の就労に関する意識の変化  
出典：内閣府「平成28年版男女共同参画白書」

の線がトップになりました。ピンクの線は、「子どもができて、ずっと職業を続ける方がよい」という意見です。

どうですか、皆さん。女子学生にアンケート調査をすると、再就職型、つまり茶色の線の意見が多くなる傾向があります。でも、女性一般の意見は、ずっと仕事を続けるという、就業継続型が多いんです。仕事と家庭の両立型と言ってもいいでしょう。

おそらく、社会に出て、実際に仕事を始めると、気持ちが変わってくるのではないかと思います。生活のために働く、あるいはもう少し余裕のある生活をするために働く、という人も結構います。どうか皆さんも、女性の生き方はこれ一種類と思わずに、臨機応変に選択して欲しいと思います。

## 六、子どもに身につけさせたい能力

最後のスライドは、数年前に京都市で行われた意識調査の結果です。「子どもに身につけさせたい能力」について、大人に聞いたものです（図5、図6）。

男の子に比べて、女の子に多かったのは、「やさしさ」「家事能力」でした。一方、女の



子に比べて男の子に多いのは、「職業能力」「リーダーシップ」「実行力」「たくましさ」でした。

グラフを見てみましょう。左側が「女の子に身につけさせたい能力」、右側が「男の子に身につけさせたい能力」です。

一番上は、「礼儀作法」です。どちらも多いですね。二段目は「家事能力」、これは左側の女の子には多くて、右側の男の子は少ない。でも、イクメンがもてる時代ですから、男の子にも家事能力は必要ですよ。

三段目と四段目は「職業能力」と「リーダーシップ」です。左側の女の子に比べて、右側の男の子の方が多くなっています。

その下の「協調性」は男の子も女の子も同じくらいですが、さらにその下の「実行力」「たくましさ」を見てみると、これも男の子のほうがとても多くなっています。

先ほど、女性の労働力率のグラフを見ていただきました。出産、子育て期にある女性たちの七割、八割が働いていました。共働き世帯の数と専業主婦世帯の数の変化も見ていただきました。共働き世帯はどんどん増えていきましたね。ずっと働き続けたほうがよい、と考える女性が一番多いというグラフも見えていただきました。

## 女性のキャリアはどう変わる

それなのに、子どもたちに身につけさせたい能力は、依然として固定的な男女のイメージ、すなわち、女の子は優しくてお料理やお裁縫が上手で、男の子はたくましくして仕事ができ、という、古いままなのです。でもどうでしょう。女性が長く働き続ける時代に、職業能力は必要ありませんか。マネージメントする力やリーダーシップは必要ありませんか。

私は管理職にならないから、関係ない。そう思っている人もいるでしょう。でも、働き続ける、ということは、仕事をしながら年を重ねていく、ということなのです。年をとっていく、ということは、自分より若い人たちが職場に入ってくるということです。若い人たちには、仕事を教えなければなりません。困っていたらきちんとサポートしてあげなければなりません。自分がいなくなっても仕事が滞らないように、後輩を育てていくことも必要になります。

そう考えると、女子大学はもつと学生たちにマネージメントやリーダーシップの力を伸ばしていく教育をする必要があると思います。

## 七、「女性のキャリアはどう変わる」から

「わたしのキャリアをどう変える」へ

冒頭でお話ししたように、キャリアとは職業や仕事のことだけを指す言葉ではありません。今では、人生で経験する役割や活動のすべてを意味するようになってきています。

女性のキャリアは、仕事一辺倒の男性に比べればバラエティに富んでいます。ずっとそうだったわけではありません。皆さんのおばあさんの時代は専業主婦が多かった時代でした。その前の時代は、日本全体が農業中心の生活をしていたので、女性たちの多くは畑で働いていました。家事・育児に専念できるほど豊かではなかったのです。

皆さんのお母さんの時代は、仕事と家事・育児の両立を目指す人たちが増えてきます。まだまだ両立が難しい時代でしたから、結婚や出産で家庭に入る人、いったん家庭に入っても再就職する人、家庭に入らないで働き続ける人、いろいろな人が出てきます。

キャリア発達の研究者にドナルド・スパーという人がいます。スパーは、キャリアを五つの段階に分けました。最初は成長段階、二つ目は探索段階、三つ目は確立段階、四

## 女性のキャリアはどう変わる

つ目は維持段階、五つ目は衰退段階です。

学生の皆さんは、いま二つ目の探索段階にいます。今後のキャリアに関する情報を集めて、自分はどういうキャリアを歩みたいのかを考える時期です。男の人たちは、大学の先輩や職場の先輩、親せきのおじさんやお父さん、いろいろな年代の男性の先輩を見ながら、五年後、一〇年後、二〇年後の自分をイメージしていくことができます。でも私たちが女性は、そんなにたくさんのロールモデルと接する機会がありません。学生時代にインターシップや研修などの体験を通して、たくさんの先輩女性たちに出会っていただきたいと思っています。

二〇三〇年、大学一年生の皆さんは三〇歳代になっています。先ほどのスーパーの理論でいえば、三つ目の確立段階になります。自分が進む方向が見えてくる頃です。

女性たちのキャリアは、今後、働き続けるキャリアへ変化していくと予想されます。今日の講座では、「女性のキャリアはどう変わる」というタイトルをつけてお話ししましたが、学生の皆さんたちには、「私のキャリアをどう変えようか」と考えながら歩んでいただけたら、とても嬉しいです。

以上で私のお話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

——二〇一六年六月二四日——